墨の伝統製法を守りながら、日本文化が凝縮した墨の魅力を広めたい

よく練られた生墨を木型に入れる直前に、「このくらいだな」という墨職人のカンが働くまで、手でさらに練る。実は、長野さんに取材を依頼すると「仕事場に入ったら、風呂に入らないと帰れないくらい全身、墨まみれになるよ」とのことで、この写真は、通常、にぎり墨体験をしている和室（工房）で作業してもらい撮影した。実際の仕事場は、まさに壁も道具も墨色に染まる“黒の世界”。特に、煤と溶かした膠を機械で撹拌する部屋は、煤が舞い上がる。なお、墨は1丁、2丁と数える。

力強く、手早く、美しく、生墨を練り上げる

12月から4月頃までの寒い時期に限って、墨はつくられる。墨の材料は、煤（すす）、膠（にかわ）、香料の3つのみ。煤に、水牛などの皮や腱から抽出したゼラチンである膠を煮溶かして合わせ、樟脳（しょうのう）など天然の香料も加えて、まず機械で撹（かく）拌（はん）して練る。次に足で踏んで練る。ローラーにもかけ、さらに、手に全体重をかけるようにして菊練りの要領で練る。「機械がない時代は、杵で3万回搗（つ）いて練ったようです」と江戸時代後期からの墨職人の家系で、奈良市にある製墨「錦光園」の6代目・長野墨延さん。奈良市には現在、墨屋が8軒あり、見習いを除けば墨職人は10人ほど。それで、固形墨の全国シェア約95％を占める。

よく練られた生墨は、触らせてもらうと人肌程度にほんのり温かく、ぎゅっと握るとグミか搗きたての餅のような弾力がある。なお、墨づくりが暖かい時期を避けるのは、動物性の膠が腐りやすいから。樟脳など天然の香料を加えるのは、膠の匂いを消すため。

「ここからが墨職人の見せ場。練った生墨を木型に入れていきます」と長野さん。手のひらで生墨をぐっと押さえるように力を入れたかと思うと、すぐさま真ん丸なボール状にまとめた。シワひとつない生墨の玉は、黒く光っている。それを太めの棒状にして、木型に入れるとぴたりと収まった。木型を万力という道具に固定するまで、一連の作業はあっという間。

「高級な材料の生墨ほどすぐに締まってかたくなるんです」「生墨の中の空気をしっかり抜いてシワなくきれいに、かつ、いかに手早くやるかが職人の度量です」。墨職人は1日に約300丁の墨をつくる。今では、生墨は炊飯器を利用して一時的に保温するが、昔は火の気のない真冬の仕事場で、自分の体に生墨を引っ付けて保温したそうだ。

型入れから15～20分ほど経って木型から出すと、模様などが付いた墨の形が出来上がった。次は乾燥の作業だ。最初はやや湿った木灰に埋めて、生墨の水分を取っていく。いきなり乾いた木灰に埋めると一晩で割れてしまうからだ。3～4日に1回、木灰の湿度を徐々に乾いたものに替えながら3～5週間かけて乾燥させる。6～7割程度、乾燥したら木灰から出して、さらに3～6ケ月、自然乾燥する。完全に乾燥すると、生墨で25gあった1丁型の墨は15gになり、大きさも3割ほど小さくなる。

木型に生墨を入れる手順は、写真左から、①すでによく練られた生墨を1丁分計量した後、あらためて練る。②底光りする真っ黒なボール状にまとめる。③すぐさま、左右同じ太さの棒状に。④木型に入れる。この後、すぐ万力で締める。⑤15～ 20分して梨の木でできた木型が多少水分を吸収したら、木型から出す。⑥表面が美しい、木型から出したばかりの墨。まだグミのように弾力があり、やわらかい。写真は3丁型の墨。この時点では75gあるが、乾燥して完成すると50gになる。

松煙墨、油煙墨などさまざまな墨が販売されている。「同じ大きさの墨でも、値段に差があるのは煤の良し悪しの差です」と長野さん。

やわらかい生墨を手で握って墨をつくる「にぎり墨」体験ができる（要予約）。つくった墨は桐箱に入れて持ち帰る。

製墨「錦光園」
奈良市三条町547
TEL 0742-22-3319

写真左上／木型も万力も炊飯器も、真っ黒に染まった仕事場。
写真左下／生墨を乾燥させる「木灰」はもはや入手できない貴重品。何千とあるという木型とともに「墨屋の財産」と長野さん。木型には、百数十年以上使い続けているものも。

関西の名工 Master Craftsman of kansai

墨職人 長野 墨延（ぼくえん）さん

1947年、奈良市生まれ。「錦光園」の6代目。大学卒業後、他業種の会社員を経験後、約2年、世界中を放浪。旅の途中、家業を継ぐことを決意した。1～3代目は奈良で最も歴史のある墨屋「古梅園」で墨職人として働き、4代目が「古梅園」から独立、「錦光園」を創業した。「墨職人として約40年になりますが、一生、勉強していかなあかんと思っています」

墨の原点である松煙墨（しょうえんぼく）と、奈良発祥の油煙墨（ゆえんぼく）

墨のメイン材料である煤には、赤松を燃やした煤、油を燃やした煤の2種類がある。赤松の煤を使った墨を松煙墨、油の煤を使った墨を油煙墨という。

墨は今から2200年前、漢の時代の中国が起源とされる。西暦610年になると、高麗の僧・曇徴（どんちょう）によって墨づくりが日本へ伝わった。この時代につくられていた墨は、松煙墨のみ。松煙墨はいわば墨の原点。「正倉院に残る墨も、ほとんどが松煙墨。紫式部も松煙墨で源氏物語を書いたんです」

やがて室町時代になると、興福寺の宿坊のひとつ二諦坊（にたぼう）で油煙墨がつくられるようになる。貝原好古の『和漢事始』（1697年）には、「中世南都興福寺の二諦坊、持仏堂の灯の烟（けぶり）の屋宇（やね）にすすぼり滞るものを取りて、膠に和して墨を作る。これ南都油煙墨の始まりといへり」とある。「お寺では仏さんに、お灯明をあげますよね。油を入れた器の灯芯に火を灯すと、すーっと煤が上がる。そこへフタを置いたら煤が溜まると奈良の寺が見つけたんですね」

油の煤の集め方は、今も当時とまったく変わらない。10cmほどの器に胡麻油や菜種油を入れて、いぐさの芯に火を灯し、フタに付いた煤をそっと取って集める。気の遠くなるような手間のかかる作業だ。さらにフタの位置を上にあげていくと取れる煤の量はぐっと減るが、粒子が細かく良質の煤が集まることを見つけたのは、二諦坊ではなくのちの奈良の墨屋の功績。

油煙墨の墨色は青みがかった黒が特徴で、貴重な赤松の煤を使う松煙墨の墨色は赤みがかった上品な黒が美しい。油煙墨のうち、胡麻油か菜種油かによっても色合いなどは違う。どれを選ぶかは使う人の好みによるが、淡墨（薄めて使う）にしたとき、いずれも「にじみ」や「かすれ」になんともいえない味わいがある。こうした味わいはよもや墨汁では出せない。

墨は、でき上がっても2年～3年は販売しない。時間をかけて熟成させるのだ。10年ほど置いた墨は古墨と呼ばれ、「色、おり、のび」がいいと長野さん。「おり」がいいとは、磨れ具合がよく墨が硯石におりていくこと。「のび」がいい古墨は、新しい墨のように膠が粘らずさらっと書ける。「いちばん見てみたい墨の色は、正倉院にある、1300年前の墨を磨ったものですよ。一生、触らせてもらえないけど（笑）」。墨の香りも、合成のエッセンスなら数か月で消えるが、天然の香料の香りは何十年経っても残る。錦光園を含めて奈良の墨屋は、樟脳以外にそれぞれオリジナルの天然香料を使っていて、「墨を磨ると、ああ、この香りはあの墨屋さんのものだなとわかります」

実は、墨は墨職人の手だけでつくられるのではない。自然乾燥の後には、専門のみがきの職人が大蛤の貝で墨をみがく。絵付け職人は彩色を。木型職人は梨の木で木型をつくる。松煙や油煙を取るのは煤職人の仕事だ。「墨は日本の伝統、技術が凝縮した、日本の文化のひとつです。その墨の魅力をもっと多くの人に伝えたい。一般の方にも生墨に触れてほしいと20年ほど前から「にぎり墨体験」を始めましたが、方法は他にもあるはず。これからも新しい墨屋の形を探りながら、伝統の墨の製法、墨の文化を守っていきたいと思っています」